

第3回仙台市文化芸術推進基本計画検討懇話会 主なご意見

基本理念について

- ①「人がよりよく生きる力の源である」、ここの部分のフレーズに共感、好感を持った。
- ②ひとりひとりの活動がまちに繋がっていくという流れが書かれているのが非常に良いと思った。文化や芸術の活動というのは、ひとりひとりの人と向き合うことができる活動であり、これまで個人個人の境遇や多様な分野を横断していくという話が出てきたのも、このひとりひとりの人と向き合っていく中で、結果的にその生活に内包される多様な社会課題や色々な分野と繋がっていくことが見えてきたからなのだと思う。その意味で、ひとりひとりというところからスタートしているのは非常に重要だと思った。
- ③ひとりひとりの境遇や生き方に寄り添うような小さな活動もきちんと重要視していくことが、ひとりひとりの人と向き合うという言葉と並ぶと良い。
- ④事業を協働で実施する際、公的な主体と市民が連携するときには、対等に一緒に行うことが大切。互いに対等である、一緒に行うという姿勢が言葉として入ってほしい。また、作り手や受け手だけではなく、つなぎ手の働きを言葉として入れてもよいのではないかと思った。
- ⑤文化芸術は必ずしも、目に見える形でコネクต์していなくとも、環境から受け止めていくというようなところがあると思う。「よりよく生きる」という文言が入っている時点で、相当、人に配慮した言葉寄りになっていると思うので、「手を携えて」という表現は取っても良いと思う。
- ⑥障害のある人等に係る法律の中では、「創造」という言葉が、どうしても作ることに限定したイメージになるため、「鑑賞」や「参加」という言葉が使われている。ものを作る、発表するというところに、施策が限定的になるっていうところから振り戻されて、ここ5年、「鑑賞」や「参加」という言葉が重視されているので、文言の検討をいただきたい。
- ⑦先日参加したシンポジウムにおいて、様々な取組みの中で、団体による連携を通じて、いわゆる地域課題が見えてくるということや、これまで全く知らなかったことが、異業種、同業者、それから世代を超えて、そういった方々が一緒になって議論することで、相対化していけるという話があった。最後には「先の見えない時代、個々の組織では解決できない課題に連携、協働で」というメッセージに集約され、「競合から共創へ」という言葉も挙げられていた。連携の重要さが、できれば説明文の中に具体的に示されると良いと思う。また、お互い一緒に作り上げていく、一緒に課題解決していくというような言葉があっても良いと感じた。
- ⑧「連携」「協働」という、ポイントとなる言葉については、事務局の方も、サブタイトル、「～ひとりひとりがよりよく生きる文化芸術の杜～」の「杜」という言葉で十分に意識しているものと受けとめている。この杜の意味することは決して自然発生的な森林ではなく、過去をたどれば、いわゆる屋敷林からスタートして、それから戦後の焼け野原に街路樹を植えて、そして緑のまち仙台を自ら作り上げたという、そういう背景がある。「杜」というキーワードは、十分にその辺を意識して、私たちはこれから文化芸術の杜というものを作っていくのだという姿勢があらわれているものと感じ取っている。ただ、これらはこうした「杜」の背景

を知っている人が分かるのであって、単なるニックネーム的な杜の都というような解釈では、そこまでは理解してもらえない。その「杜」の意味することについて説明文の中で触れる必要があると思う。

- ⑨「文化的環境」、「担い手たる市民の存在は欠かせない」という記述が気になった。文化は基本的に自由にそれぞれの人がやる。だから仙台市の文化は仙台市民が作ってきたものであり、今後も作っていくものと思うので、文化的環境として紹介する必要はないのではないかなど思った。この段落は、市民が文化を作っていく、それを未来につなぎ、発展させるのも市民だということを明確にした上で、市の役割を宣言するところではないかと思う。

第2章 仙台市の文化芸術の現在地について

- ①文化政策というのは総合政策だと思う。計画の位置付けを見ると、これから策定する計画は仙台市の基本計画に基づいていて、観光、教育、福祉、その他といった個別計画と連携すると示されているが、この「その他」というところが実は非常に重要ではないかと思う。観光や地域活性化はもちろん、例えば、医療、アートとテクノロジー、メディアアートなど、これまで関わりがなかった分野も関わってくることを考えると、市民すべての生活分野に関わる総合政策として捉えていきたいと考えている。
- ②仙台圏域だけではなく、日本全国においてあるいは東北のゲートウェイとして、仙台の文化芸術、あるいは都市がどういうところにあるのか、そういった大局的な観点から見ていくことも重要ではないかと思う。
- ③「障害のある方や子どもたちに向けた取組み」という文言が気になっている。年齢や国籍等にも関わらずというような要素も加えた時に、ここのタイトルは「社会包摂を基調とした取組み」というように大きくとらえた方が良いかと思う。

施策と取組みについて

(1)全体

- ①今回は、白紙で計画を作るわけではなくて、既存の大事なものを次に生かしながら、そして新しいニーズにこたえて、次の、未来につながる新しい事業も盛り込みながらこの計画を作っていくというような考えだと思う。新しく必要があるものについては、ある程度成果が出るような形で重点プロジェクトを作るという考え方は非常に理解できるところ。
- ②このような計画を立てたときに、それが具体的に実践できるかどうかということが心配。あまり欲張らずに、重点化して、これとこれを5年間でやっていく、それでもって仙台市の文化芸術を充実させる、というような姿勢でも良いと思う。
- ③この基本計画が作られることによって、変化していく方向性が分かるように、既存のプログラムと新規に行うものが、分かりやすく見えると良いのではないかと感じた。
- ④行政が計画を作るのは、条件整備や環境整備であり、1つの活動ではできない基盤づくりだとしたときに、12の施策うち、⑨アーカイブの推進と⑤基盤づくりにかかる調査・研究というのは重要であり、特色になるのではないかと思った。
- ⑤「アーカイブの推進」に関して、こうした記憶の継承に関わる部分は仙台市が作る計画と

しての特色であり、1つの活動ではなかなか成し得ない全体のベースづくりになるものだと思う。

(2)基盤づくり

- ①「基盤づくりにかかる調査・研究」が、目指す姿2の「多様な文化芸術活動が展開され、その担い手が育まれるまち」にだけに紐づけられているが、もう少し幅広に考えても良いのではないかと思う。
- ②5年間の計画期間では調査研究する時間があったのではないかと。基盤づくりをどんどん進めていく、推進するなど書いて、サブの部分で調査研究も併せてします、という立て付けの方が良いのではないかと思った。
- ③「基盤づくりにかかる調査・研究」は、コーディネーターや担い手という、これまでの議論で繰り返し出てきたことなので、この部分をどのように実施するのかということは、新たな活動として重要な軸になるのだと思う。また、試行的な取り組みを行うぐらいまで、仙台の場合は踏み込んだ記述も想定できるかと思う。
- ④人材育成は時間がかかる。新しい担い手、コーディネーターになるような人が入ってくる仕掛けをつくる必要もあり、また仙台でこれだけコーディネーターの議論が出ているということは、既にコーディネーターの人たちがいるということなので、たとえば助成事業で、事業だけではなく人にかかる経費やコーディネーターにかかる経費というものをきちんと項目に入れることで明確化するなど、既にいるコーディネーターの人たちの環境を改善するという視点も必要なのではないか。

(3)情報発信

- ①文化芸術に親しめる環境づくりとしての情報発信の体制の見直しの観点で、情報発信を仕組みとして、体制として考える必要があると思った。
- ②情報発信力の強化、これこそ大切にしたい。市民に対するアンケートの結果にも、機会があれば、文化芸術に関わりたいという回答がたくさん寄せられたが、その機会は情報によって作られる。情報が多ければ、そこに選択が生まれて機会が生まれるので、情報についてはかなり深く、表記していただきたい。
- ③最近ではデジタル世代の情報発信であり、情報を受けた方が、自分たちのコミュニティ、仲間に回していく、リツイートする、拡散していく、そうした形での情報発信となっている。行政だけが発信者ではないので、情報発信のあり方も既存の考え方と少し違うということ念頭に置きながら、市は何をしなければいけないのかということ考える必要がある。文化芸術セクションだけで完結する話ではなく、観光のセクション、民間の様々なサイトもあるので、まさに連携して、よりよい情報発信のシステムを構築していただければと思う。

(4)情報保障

- ①情報発信、あるいは、障害のある人たちを含む社会的弱者へのアクセシビリティなど、こうした視点も基盤整備として活動の強化が必要。こうした視点を、施策の第1の部分にしっかり入れるということも必要だと思う。

②情報保障の話は、もしかしたら目指す姿1～5の共通の項目に入ってくるのではないか。

(5)その他

- ①文化施設について、最近は様々なオープンスペースでの取組みもあり、小さな活動であれば、身近なところのオープンスペースやパブリックスペースの活用というのも、様々な制度の改正などもあって利用がしやすくなっていると思う。文化施設のみならず、表現活動を行えるような空間の環境整備への視点も加えてはどうかと感じた。
- ②青葉山エリアや定禅寺通の、観光等に力点を置いた人々の流れを重視したところでの地域のキーワードが多く出てくるが、仙台市の海側のエリアにかかる文言についても、全体を通じて欠けていないか、検証する必要があると思う。

推進体制について

- ①外部の視点を入れた評価体制、ここはぜひ取り入れていただきたいと思う。きちんと評価ができれば次の施策に繋がっていく。その必要性やニーズが明らかになっていけば、当然そこで予算措置もかなり実現されやすくなるので、このPDCAサイクルはぜひ回していただきたい。
- ②市の役割のところ、なかなか入れるのが難しいかもしれないが、例えば予算措置や、ルールの更新という言葉を入れると、行政側が基盤整備するということがより見えやすくなるのではないかと思う。
- ③実施メンバー間で議論のテーブルを作る推進体制もあるのではないだろうか。会議体だけでなく、推進、運営体制を庁外につくると良いのではないかと思った。
- ④計画の推進に係る仕組みについて、行政や外郭団体、そして市民団体、あるいは芸術家という個人と一緒に作っていく議論していける座組があるべきという意見があったが、これに強く同意している。「競合から共創」へ、まさしく個人や団体の私利私欲ではなく、どういかに質の高い環境を作っていけるかというところを考えていきたい。私たちは、被災と復興を経た文化を持つ市であり市民たちであると思うので、この仕組みは重要だと思う。本当の計画の推進という意味で、議論の場が開かれていくということを期待したいと思っている。
- ⑤計画という枠組みがあるからこそ見えてきた新しい機能があり、それを実装していくべきであるという議論に今、なっていると思う。機能が増えるということは、それが実施に移ったときに仕事が増える。そのために人が必要なことは明確。文化活動に参加した人がウェルビーイングになるのはもちろん大事だが、その活動を回す人のウェルビーイングが失われたら意味がないので、計画に関わっている人もよりよく自分を変化させながら進めていく運営体制を考えるのは重要だと改めて思った。